SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

朝鮮の挽歌「香頭歌」（別回心曲）の紹介と日本語訳

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎭, 全, 高香 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010041

朝鮮の挽歌「香頭歌」（別回心曲）の紹介と日本語訳

南　富鎭・全　高香

一　挽歌について

『祝祭』[1]という韓国映画がある。韓国の伝統的な「葬儀」とそこに集う人々の人間模様を描いたヒューマンドラマである。老母の死をきっかけに一家に潜在していたさまざまな葛藤が一気に噴出、その葛藤が頂点に達し、いわば修羅場となっていくなか、いよいよ野辺送りの挽歌が力強く唱われ、それらの葛藤は収束に向かう。すべての葛藤は挽歌に集約され、挽歌が唱われていく中で収束する。生きている人間同士の絆を確認させ、結び直し、あるいはほぐしていく。挽歌が死者だけではなく、むしろ生者にとって極めて重要な役割を果たしているのである。

挽歌は『祝祭』でも見られるように、「生と死の橋渡し」的な役割を担っている。映画では「あの世の門が開くか否かは挽歌にかかっている」とも語られている。言うまでもなく、挽歌とは棺を載せた輿を葬地まで引きながら唱う節のついた歌である。朝鮮時代の葬儀では儀礼の一部として唱われており、歌詞はほぼ変わることなく、口承で受け継がれてきた。そして挽歌にこそ朝鮮人の他界観や死生観が凝縮されていると言える。日本では馴染みの薄い朝鮮の挽歌について紹介するのが本論の目的である。まずは挽歌に関する先行研究の一部を紹介する。

韓国における挽歌の研究は、1940年代後半、民謡の一つのジャンルとして高晶玉を筆頭に始まった[2]。1960年代には任東權によって学問的な土台が整えられ、抒情、叙事、時代、形式、主題などによる西洋ジャンル論を借りた分類方法が提案された[3]。これを受けて、1970年代になると金聖培が全国の挽歌を収集、調

1　林權澤監督、1996年、安聖基主演
2　申瓚均『韓国의 輓歌』〈韓国の挽歌〉（三星出版社、1991）、参照
3　李綏衡「한국 만가의 연구」〈韓国挽歌の研究〉忠南大学校大学院修士論文（1990）参照

査し130首の目録を作成した。一方、地域研究の一環として趙東一が慶北地方を、徐元變が鬱陵島の挽歌を収集するなど、地域挽歌の比較研究が行われるようになる[4]。

1980年代に入ると、これまでの分類、研究アプローチに変化が見られ、挽歌の内容に表れる主題が分析対象となり、そこから韓国人の意識、他界観、霊魂観などの研究がされるようになった。その先駆けが鄭東華、金武憲であり、孫ジョンフム、(손종흠)、柳鐘穆、李光奎（이광규）などがそれに続く。孫ジョンフム、(손종흠）は、挽歌の内容から宿命、祈願、虚無、死後審判意識など、韓国人の深層意識を抽出する[5]。一方、柳鐘穆は、挽歌の起源とそこに見られる虚無思想、別離、他界観に注目しながら、主題による分類や歌の形式的な研究を試みた。李光奎（이광규）は祖先崇拝と関連付け、回心曲挽歌を分析、韓国人の霊魂の所在や他界観を提示した[6]。

1990年以降は挽歌の思想的背景を主とした研究が進められ、理論的に体系化されるようになり、中国、日本などの挽歌との比較も試みられるようになった。申瓚均は、挽歌の背景に風水地理や文学作品、韓国人の思考方式や思想、他界観や死生観よりアプローチし、日中韓の挽歌の比較考察なども行っている[7]。李緩衡は挽歌研究の意義を、来世観の様態分析を通して韓国人の他界観を理解することにあると強調し、その思想的背景を「儒教・仏教・道教・巫俗」の影響から分析、考察している[8]。

90年代末になると、韓国では火葬への葬送形態の変化が広く見られ、埋葬を土台とする挽歌は急激に影を潜める。これに対応し、挽歌は無形文化財に登録されるなど[9]、伝統芸能として受け継がれるようになった。現在、挽歌は徐淵昊等によって仏教儀礼や巫俗のクッ、喪主ノリなどの伝統芸能からのアプローチがなされ、調査研究が続けられている[10]。

これまでに発表された文献資料の主たるものの一部を以下に紹介する[11]。

---

4 申瓚均、前掲書参照
5 申瓚均、前掲書参照
6 李緩衡、前掲論文参照
7 申瓚均、前掲書参照
8 李緩衡、前掲論文参照
9 徐淵昊『韓国の伝統芸能と東アジア』(論創社、2015）217頁。現在、ソウル市江東区岩寺洞（パウィジョルマウル）好喪ノリ、仁川近海島嶼地方の喪輿ソリ、忠清南道扶余の喪輿ソリ、全羅南道珍島の輓歌などを挙げることができる。
10 徐淵昊、同上掲載書参照
11 申瓚均、前掲載書、27,28頁

著　者	書　　名	出版社	出版年度	挽歌収録集
高　晶　玉	朝鮮民謡研究	首善社	1949	２首
任　東　權	韓国民謡集Ⅰ 韓国民謡集Ⅱ～Ⅵ	東國文化社 集文堂	1961 1974～1981	152首
金　聖　培	香頭歌・成造歌 韓国の民俗	正音社 集文堂	1975 1980	53首 130首
趙　東　一	慶北民謡	蛍雪出版社	1977	10首
徐　元　燮	鬱陵島民謡と歌辞	蛍雪出版社	1982	１首
金　武　憲	韓国労働民謡論	集文堂	1986	７首
韓國精神文化研　究　院	韓國口碑文學大系 各道地域篇44巻	同研究院	1980～1987	182首
イ　ソ　ラ	韓國の農謡第１～３集	玄岩社	1984～1989	88首
申　瓚　均	韓國の輓歌	三星出版社	1990	796首

韓国において一般的に挽歌とは、葬送時に棺を載せた輿（喪輿：サンヨ）を葬地まで運びながら唱う歌を指し、地域によっては喪輿歌（サンヨソリ）、香頭歌（ヒャンドゥガ）[12]などと呼ばれている。その歴史はおそらく原始時代から始まったと言ってよいだろう。昔から葬送時に何らかの形で唱われていたものが、習慣化、形式化し、土着の巫俗信仰に儒教、仏教、道教、風水地理などの外来宗教が習合、儀式歌として唱われるようになったと考えられる[13]。それに加え、当初から重い喪輿（サンヨ）を墓地のある山まで担いで運ぶという労働歌謡の側面も強くあったため、儀式的には死者を鎮め、遺族を慰め、霊魂をあの世へ無事に送り届ける役割を担い、形式的には労働歌謡に適したリズムを持つことになったと言えるだろう。

先行研究による申瓚均の調査では、おおよそ796種の挽歌が確認されているが、その内容と形式においては大きな相違がなく、地方ごとに特色が見られるに過ぎない。挽歌に見られるこのような固定した形式と内容は、発生初期から現在に至るまで、さほど変わることなく口承によって受け継がれてきた結果によるのかもしれない[14]。挽歌の形式は、民謡の問答形式（交唱形式）を基本と

[12] 元来は仏教用語で、信徒や僧を香頭（ヒャンドゥ）と呼んでいたことに由来する。金聖培『香頭歌・成造歌』（正音社、1975）
[13] 金聖培、同上掲載書257頁参照
[14] 申瓚均、前掲書参照

する。先唱者がヨリョンという寺院で使う鈴(りん)を鳴らしながら音頭を取り、担ぎ手がそれに応えて唱和する。全体的に一本調子であり、リズムの音数律は４・４調の単調な定型である[15]。歌詞は一貫性のある叙事構造をなすケースが多く、民謡、時調、歌辞、宗教歌謡などの朝鮮伝来の文学作品や、漢詩文、中国の故事などが多く借用、引用されている。あるいは挽歌が文学作品に影響を与えた可能性も考えられる。内容的に分類すると、基本型である「回心曲型」「風水地理型」と、変則型である「即興創作型」「混合型」に分けられる[16]。

二　本論紹介の「香頭歌(ヒャンドゥガ)」について

本稿で日本語訳を試みた挽歌は、金聖培『香頭歌・成造歌』(1975）の冒頭に収録されている「香頭歌(ヒャンドゥガ)」である。鄭ソンテク（정성택）氏（男・57歳・労働者、ソウル市鐘路区東崇洞洛山、1959年７月13日採取)[17]によって唱われたものを書き留めたものである。回心曲型挽歌に分類できるこの「香頭歌」は、「回心曲」[18]から派生した「別回心曲」という仏教歌辞が忠実に引用されている。構成は３・４調または４・４調を中心とした289句からなる。「回心曲」とは和請(ファチョン)[19]と言われる仏教音楽[20]の一曲目である。そこではこの世とあの世、極楽世界、因果応報や歳月の儚さなどが唱われており、功徳を積むことを勧め、孝行を説く教訓的な内容になっている。

「回心曲」の作者として伝わる西山大師は、豊臣秀吉の朝鮮出兵時、王命により僧軍を率いて手柄を立てた高僧である[21]。大師は朝鮮王朝の崇儒排仏政策のなか、諸宗教間の和解を図り、儒、仏、道における三教統合論の起源を作った人物である[22]。それ故、「回心曲」は仏教歌辞といえども、内容においては仏教的なものばかりではなく、儒・道・風水地理・巫俗の思想などが混合されている[23]。朝鮮王朝時代は一貫して崇儒排仏の政策がとられており、仏教が社会の

---

15 李緩衡、前掲載論文71頁
16 李緩衡、前掲載論文参照
17 金聖培、前掲書12－17頁参照
18 西山大師の作と伝わる「回心曲」(普観念仏文、海印寺木版本、朝鮮歌謡集成、釈門儀範等に収められている)。この回心曲を根幹として「別回心曲」「特別回心曲」「続回心曲」等が作られていき、その資料は朝鮮歌謡集成、校註歌曲集、釈門儀範等に収められている。趙明烈「朝鮮時代仏教歌辞に現らわれた浄土信仰」(『印度学仏教学研究』46－２、1998）を参照
19 和請とは、やさしい韓国語を使い、庶民にとって身近な節をつけて法文を唱うことを指す。主に霊魂薦度儀式で唱われている。(徐淵昊、前掲載書参照)
20 梵唄とも言われ、仏教儀式などで唱われるもの。(徐淵昊、前掲載書参照)
21 李緩衡、前掲載論文77頁
22 宋天恩「休静の三教観」『印度学仏教学研究』41－２（1993）参照
23 李緩衡、前掲載論文参照

表面に出てくることは厳しく制限されていた。それでも仏教は、民間信仰や巫俗などと習合していき、人びとに根強く信じられていたという。支配階級の士大夫（両班）が理想とする儒教社会と儒教倫理はあくまでも表層的なもので、社会の裏面と底辺では仏教が生活の中に取り込まれ、一般民衆の生活情緒に深く根を下ろしていた。仏教思想に基づく歳時風俗や部落祭が盛んに行われており[24]、「回心曲」のような仏教歌辞も広く流布していたといえる[25]。

「回心曲」は民衆的な基盤を背景に大師によって作られ、和請の代名詞になるほど民衆に親しまれていたが、その所以は、儒教的な性質の強い偽経「父母恩重経」を取り込むなど、儒教とも一定の調和を保っていたことに依るところが大きいと言えるだろう。儒教的な儀礼である葬送挽歌に「回心曲」が歌われるようになったのは、こうした調和性と普遍性によるものと思われる。同時に、誰もが受け入れられるような唱和であったことも大きな要因であろう。

管見の限りでは、朝鮮の挽歌が一篇を通じ全て日本で翻訳紹介されたことはない。研究資料の引例のごく一部分として、あるいは小説や映画の短い一場面（字幕）として訳されているに過ぎない。以下のものに日本語訳のごく一部分が見られる。

徐淵昊『韓国の伝統芸能と東アジア』（論創社、2015）213－217頁
櫻井哲男『「ソリ」の研究』（弘文堂、1989）159－162頁
竹田旦「韓国における他界観について」『東アジアにおける民族宗教』（吉川弘文館、1981）508，509頁
村田喜代子『龍秘御天歌』（文藝春秋、1998）218，239頁
映画『祝祭』（字幕）林權澤監督、1996年、安聖基主演

以下に挽歌「香頭歌」の本文と日本語全訳を紹介する。

三　「香頭歌」（回心曲型挽歌）日本語訳

ソウル市鐘路区　1959.7.13　鄭ソンテク
金聖培（1975）『香頭歌・成造歌』12－17頁

세상천지 만물중에	世上天地、万物の中
사람밖에 또있는가	人間の他にまた何があろう

[24] 武田幸男編『朝鮮史』（新版世界各国史２）（山川出版社、2000）189頁
[25] 趙明烈、前掲載論文参照

에해－에해	エヘ～　エヘ
여보시오 시주님네	ヨボシオ　施主[26]の皆さま
이내말씀 들어보소	わしの話をお聞きくだされ
이세상에 나온사람	この世に生まれし者
뉘덕으로 나왔는가	誰が隠匿で生まれたか
석가여래 공덕으로	釈迦如来の功徳によりて
부모님전 뼈를빌어	父上より骨を借り
어머님전 살을빌어	母上より肉を借り
칠성님전 명을빌어	七元星君[27]に命を祈り
제석님전 복을빌어	帝釈天に福を祈り
이내일신 탄생하니	わが一身、生を授かれど
한두살에 철을몰라	齢若(よわい)くして分別もなく
부모은덕 알을손가	父母のご恩知る由もなし
이삼십을 당하여도	二十三十になれども
부모은공 못다갚아	父母のご恩に今だ報えず
어이없고 애닯고나	情けなくやるせない
무정세월 여류하여	儚い歳月(としつき)流れては水の如く
원수백발 돌아보니	憾む白髪の我が身なり
없던망령 절로난다	いつしか老いぼれとなりゆく
망령이라 흉을보고	陰では呆けたと悪口を叩かれ
구석구석 웃는모양	そこかしこ嘲笑う人びと
애닯고도 섧은지고	切なくて哀しくて
절통하고 통분하다	悔しくて口惜しい
할수없다 할수없다	仕方がない止むを得ない
홍안백발 늙어간다	紅顔白髪(はくはつ)に老いてゆく
인간의 이공도를	人間の歩むこの定め
누가능히 막을손가	誰が能く防げよう
청초 연년록이나	青草(あおくさ)は毎年緑となれど
왕손은 귀불귀라	王孫(ひと)は往っては戻らず

[26] 日本では檀家の意に近い。
[27] 北斗七星の意。昔民間では七元星君、七星如来、七星様、七星神などと呼ばれていた。中国道教の日月星辰信仰を韓国の仏教が受容、習合し信仰していた。

우리인생 늙어지면	この人生老いさらばえば
다시젊지 못하리라	若さは再び戻らない
인간백년 다살아야	人間百年生きたとて
병든날과 잠든날과	病む日や眠る日多く
걱정근심 다제하면	憂いや悩みの日々除けば
단사십도 못살인생	四十にも充たぬこの人生
이제오늘 성탄몸이	今日ここに生まれし我が身
저녁나절 병이들어	夕方には病となりて
섬섬약질 가는몸에	ひ弱な身はやせ細り
태산같은 병이드니	泰山のような病を得れば
부르나니 어머니요	心より叫ぶは　オモニ
찾는것이 냉수로다	探し求めるは冷水のみ
인삼녹용 약을쓰나	人参鹿茸（ろくじょう）を使ったとて
약효험이 있을손가	どれほど効き目があろうか
판수불러 경읽은들	巫覡（パンス）[28]を招きお経を上げたとて
경의덕을 입을손가	どれほど御利益があろうか
무녀불러 굿을하나	巫女を呼びお祓（クッ）いしたとて
굿덕인들 입을손가	どれほど効験（ききめ）が得られようか
재미쌀을 빌고빌어	お米を供え祈りに祈り
명산대찰 찾아가서	名山大刹を訪ね歩き
상탕에 메를씻고	上湯で供養米を研ぎ
중탕에 목욕하고	中湯で身を清め祓い
하탕에 수족씻고	下湯で手足を清め
촛대한쌍 벌려놓고	蝋燭を左右に灯し
향로향합 불갖추고	香炉香盒（こうごう）で香を焚き
소지일장 드린후에	紙一枚燃やし捧げて
비나이다 비나이다	お頼み申す　お頼み申す
칠성님전 발원하고	七星君殿に願を立て
신장님전 공양한들	神将殿に供養したとて
어느성현 알음있어	いかな聖賢の智見あり
감흥이나 할까보냐	感興など催すのだろうか

[28] 占いを業とする盲人。

제일전에 진광대왕	第一殿に秦広大王（不動明王）
제이전에 초강대왕	第二殿に初江大王（釈迦如来）
제삼전에 송제대왕	第三殿に宋帝大王（文殊菩薩）
제사전에 오관대왕	第四殿に五官大王（普賢菩薩）
제오전에 염라대왕	第五殿に閻魔大王（地蔵菩薩）
제육전에 변성대왕	第六殿に変成大王（弥勒菩薩）
제칠전에 태산대왕	第七殿に泰山大王（薬師如来）
제팔전에 평등대왕	第八殿に平等大王（観音菩薩）
제구전에 도시대왕	第九殿に都市大王（勢至菩薩）
제십전에 전륜대왕	第十殿に転輪大王（阿弥陀如来）
열시왕의 명을받아	十師王[29]の命を受け
한손에 철봉들고	片手に鉄の棒を持ち
한손에 창검들고	片手に槍と剣を持ち
쇠사슬을 비껴차고	鉄鎖を斜めに肩にかけ
활등같이 굽은길로	弓なりのつづら折りの道を
살대같이 달려가서	放たれた矢のように駆けていき
닫은문을 박차면서	閉じた門を蹴飛ばしながら
뇌성같이 소리하고	雷鳴のような声を上げ
성명삼자 불러내어	名の三文字読み上げて
어서가자 바삐가자	さあ行こう　早く往こう
뉘분부라 거역하며	この命にいかで逆らおう
뉘명이라 지체할까	この令をいかで遅らせよう
실낱같은 이내목숨	消えゆくこのわが命
팔뚝같은 쇠사슬로	腕のような太い鎖で
결박하여 끌어내니	縛り上げ引きずり出される
혼비백산 나죽겠네	嗚呼、魂は飛び魄は散る
여보시오 사자님네	ヨボシオ　使者さま
노자도 갖고가게	路銀もお要りかと
만단개유 애걸한들	いろいろ尽くして哀願するも
어느사자 들을손가	どの使者が聞き入れてくれようか

[29] 十大王、十王ともいう。冥界で死者を裁く10人の王。特に有名なのが閻魔大王。

불쌍하다 이내신세	不憫なりこのわが身の上
인간하직 망극하다	人間(じんかん)との別れ恐れ多く
명사십리 해당화야	明沙十里に咲く海棠花(へダンファ)[30]よ
꽃진다고 설워마라	花の散るを悲しむことなかれ
명년삼월 봄이오면	来(きた)る三月春となれば
너는다시 피련마는	おまえは再び咲くけれど
우리인생 한번가면	わが人生一度過ぎゆけば
다시오기 어려워라	再び訪れることはなし
북망산 들어갈제	いざ北邙山へ往く際(とき)は
어찌갈고 심산험로	深山険路いかで往こう
한정없는 길이로다	果てしなき長き道のり
언제다시 돌아오랴	いつまた戻って来れようか
이세상을 하직하니	この世に別れを告げたれば
불쌍하고 가련하다	不憫なり　哀れなり
처자의 손을잡고	妻子と手に手を取り合い
만단설화 다못하여	話せど語れど尽きることなく
정신차려 살펴보니	気を取り直し見わたせば
약탕관 벌여놓고	そこかしこと置かれた薬罐
지성구호 극진한들	至誠尽くし助けようとて
죽을목숨 살릴손가	死にゆく命いかで救えよう
옛늙은이 말들으니	昔の爺やの話によれば
저승길이 멀다더니	あの世(チョスン)[31]への路は遠いと言うけれど
오늘내에 당하여서	今日我が身のことなれば
대문밖이 저승이라	大門の外があの世(チョスン)なるかな
친구벗이 많다한들	友　友垣多いと雖も
어느누가 동행할까	いったい誰が同行してくれよう
구사당에 하직하고	旧祠堂に別れを告げ
신사당에 허배하고	新祠堂に礼拝し

[30] ハマナス、バラ科の落葉小低木。海岸砂地に自生。朝鮮半島では５～８月に赤い花が咲くという。
[31] 韓国では昔から人が死ぬと霊魂が肉体を離れ、チョスン（저승）と呼ばれる「あの世」へ行くと言われている。対義語はイスン(이승)「この世」。韓国語でチョ・イは「あの・この」を表す指示代名詞で、スンは「世、世の中」を意味する。

대문밖을 썩나가니	大門を出るやいなや
적삼내어 손에들고	チョゴリを出して手に取りて[32]
혼백불러 허배하니	わが魂魄に礼拝すれば
없던곡성 낭자하다	いまや哭き声響きわたる
일직사자 손을끌고	日直使者[33]に手を引かれ
월직사자 등을밀어	月直使者に背中を押されて
풍우같이 재촉하여	風雨の如く急き立てられては
천방지방 몰아갈제	右往左往と追い立てられる
높은데는 낮아지고	高き処は低くなり
낮은데는 높아진다	低き処は高くなる
악의악식 붙은재산	粗衣粗食で貯めた財産
먹고가며 쓰고가랴	食べて使って往こうじゃないか

사자님아 사자님아	使者さま　使者さま
내말잠깐 들어주오	わしの話をどうか聞いてくれ
시장한데 점심하고	お腹も空いたし　お昼にしないか
신발이나 고쳐신고	傷んだ草履を繕いながら
쉬며가자 애걸한들	休んで往こうよと哀願するも
들은체도 아니하고	聞き入れられることもなし
쇠몽치로 등을치며	鉄槌で背中を叩かれ
어서가자 바삐가자	さあ行こう　早く往(ゆ)こう
이렁저렁 여러나라	あの国この国めぐりにめぐり
저승원문 다달으니	あの世(チョスン)の門にたどり着けば
우두나찰 마두나찰	牛頭羅刹(ウドゥナチャル)　馬頭羅刹(マドゥナチャル)[34]
소매차며 달려들어	袖をまくりて駆け寄りて
인정달라 비는구나	情けをくれと請う有様
인정쓸돈 반품없다	情けなんぞとんでもない
담배끊고 모은재산	煙草も喫わず貯めた財産

[32] 招魂、魂呼び。死者の名を大声で叫び魂を呼び戻す儀礼。普段身につけていた服を手に持ち屋根に上り、北に向かって死者の名を３度呼ぶ儀礼の手順。
[33] 日直使者、月直使者は「あの世」を守る閻魔大王の使い。死者の魂を閻魔大王の前まで連れて行く役目を負っている。
[34] 地獄で死者を攻めるという悪鬼。

인정한품 써볼손가	情けはひとつもかけるものかと
저승으로 옮겨올까	あの世へでも移してみようか
환전부쳐 가져올까	駄賃を渡し送ろうか
의복벗어 인정쓰며	服を脱ぎ情けにと渡し
열두대문 들어가니	十王門の中に入れば
무섭기도 끝이없고	恐ろしさは限りなく
두렵기도 측량없다	怖さも計り知れない
대령하고 기다리니	命を受けて待つ間
옥사직이 분부듣고	獄吏の命に促され
남녀죄인 등대할제	男女罪人台に登ぼる際
정신차려 살펴보니	目を凝らし察してみるに
열시왕이 좌기하고	十師王が並びて座り
재판관이 문서잡고	裁判官は文書を手に
다짐받고 봉초할제	厳しく尋問する間
어두귀면 나찰들은	魚頭鬼面の羅刹らは
전후좌우 벌려서서	前後左右と立ち並び
기치창검 상엄할때	旗幟槍剣物々しきなり
형벌기구 차려놓고	刑具はすでに並べられ
대성호령 기다리니	号令一声待つ間
엄숙하기 층략없다	なんとも厳粛なるかな
남자죄인 잡아들여	男の罪人連れ出して
형벌하며 묻는말이	拷問して問い質すに
이놈들아 들어보라	汝ら　ようく聞け
선심하랴 발원하고	善徳を積み願を立て
진세간에 나아가서	世俗の塵垢に生を享け
무삼선심 하였는가	いかなる功徳を積みにしか
바른대로 알뢰어라	ありのままに申してみよ
용방비한 본을받아	竜逢比干[35]を手本とし
임금님께 극간하여	主君には諫めを尽くし
나라에 충성하며	国には忠を尽くし

[35] 忠臣の意。夏の君主の桀に仕えた「竜逢」と、殷の君主の紂に仕えた「比干」のことで、暴君に仕え君主を諫め処刑された臣下に喩えた熟語。

부모님께 효도하며	父母には孝を尽くし
기사구제 하였는가	飢えを救い助けたか
헐벗은이 옷을주어	持たざる者に服を与え
구난공덕 하였는가	救難功徳を施したか
좋은곳에 집을지어	良き処に家を建て
행인공덕 하였는가	行人功徳を果たしたか
깊은물에 다리놓아	深き川に橋を架け
월천공덕 하였는가	越川功徳を積んだのか
병든사람 약을주어	病人に薬を与え
활인공덕 하였는가	活人功徳を施したか
높은산에 불당지어	高き山に仏堂を建て
중생공덕 하였는가	衆生功徳を積んだのか
좋은밭에 원두심어	良き畑に園頭(ウォンドゥ)[36]を植え
행인해갈 하였는가	行人口渇を施したか
부처님께 공양드려	仏様を供養して
마음닦고 선심하여	心を修め精進し
염불공덕 하였는가	念仏功徳を施したか
어진사람 모해하고	善き人を欺き貶め
불의행사 많이하며	不義を重ねに重ね
탐재함이 극심하니	貪欲は甚だしく
너의죄목 어찌하리	汝の罪如何とせん
죄악이 심중하니	その罪ますます重く
풍도옥에 가두어라	酆都獄[37]に閉じ込めよ
착한사람 불러내어	善き人を呼び出して
위로하며 대접하여	慰めもてなし言うには
몹쓸놈들 구경하라	悪人どもは見るがよい
이사람은 선심으로	この者は良き心にて
극락세계 가올지니	極楽往生する身となる
이아니 좋을손가	なんと羨ましいことよ
소원대로 부를적에	願いのままを申すなら

[36] 畑で栽培するマクアウリ・キュウリ・スイカなどの野菜の総称。
[37] 道教でいう地獄の意

네원대로 하여주마	思いどおりにして進ぜよう
극락으로 가려느냐	極楽へ往きたいのか
연화대로 가려느냐	蓮華台へ往きたいのか
선경대로 가려느냐	仙境へ往きたいのか
장생불사 하려느냐	長生不死を望むのか
서왕님의 사환되어	西王母の使いとなり
반도소임 하려느냐	蟠桃会[38]にてお仕えしたいのか
네소원을 아뢰어라	そなたの願いを申してみよ
옥제에게 소품하사	玉皇上帝[39]にお頼み申そう
남중절색 되어나서	絶世の美男子となりて
요지연에 가려느냐	瑶池宴[40]へ往きたいのか
백만군중 도독되어	百万率いる都督となりて
장수몸이 되겠느냐	将軍の身になりたいのか
어서바삐 아뢰어라	さあ　はやく申してみよ
옥제전에 주문하여	玉皇上帝にお頼み申し
석가여래 아미타불	釈迦如来　阿彌陀佛
제도하게 이문하자	衆生済度をお頼み申そう
산신불러 의논하며	三神[41]を招き話し合い
어서바삐 시행하여	いち早く執り行う
저든사람 선심으로	皆さまのよき心を以て
쉬이되어 나가리라	容易くことは成就するだろう
대웅전에 초대하여	大雄殿にお招きし
다과올려 대접하며	茶菓を以てもてなして
몹쓸놈들 잡아내어	悪人どもを引きずり出し
착한사람 구경하자	善人は見るがよい
너희놈은 죄중하니	汝らの罪は重く
풍도옥에 가두어라	酆都獄に閉じ込めよ
남자죄인 처결한후	男の罪人を処罰した後

38 蟠桃とは西王母の不老不死の仙桃。蟠桃会は西王母の聖誕祭のことで陰暦３月３日に行われたという。
39 道教の最高神。
40 周の穆王が西王母に会ったとされる池での神仙たちの宴。
41 古代朝鮮建国の祖とされる神、桓因、桓雄、桓倹のこと。

여자죄인 잡아들여	女の罪人を連れ出して
엄형국문 하는말이	拷問加え問い質すに
너의죄목 들어봐라	そなたの罪を挙げてみよ
시부모와 친부모께	舅姑と我が父母に
지성효도 하였느냐	精根込めて孝行したのか
동생항렬 우애하며	一家同輩と友愛し
친적화목 하였느냐	親戚一同仲睦まじく
고약하고 간혹한년	不届きで邪悪な女人(にょにん)ども
부모말씀 거역하고	父母の命に背いては
동생간에 이간하고	同輩と仲違い
형제불목 하게하며	兄弟で反目しあい
세상간악 다부리며	悪事を重ねに重ね
열두시로 마음변화	四六時中　心定まらず
못듣는데 욕을하고	陰では悪口をたたき
마주보고 웃음낙담	面と向かえば笑顔で
군말하고 성내는년	屁理屈並べて腹を立て
남의말을 일삼는년	他人(ひと)の噂に悪口重ね
시기하기 좋아한년	妬み深き女子(おなご)どもは
풍도옥에 가두어라	酆都獄に閉じ込めよ
죄목을 물은후에	罪状を尋ねた後(のち)に
온갖형벌 하는구나	あらゆる刑罰を加える
죄지경중 가리어서	罪の軽重を選り分けて
차례대로 처벌할제	次々と罰に処する際(とき)
도산지옥 화산지옥	刀山地獄　火山地獄
한빙지옥 금주지옥	寒氷地獄　禽獣地獄
백설지옥 독사지옥	拔舌地獄　毒蛇地獄
각처지옥 부부지옥	各処地獄　夫婦地獄
모든죄인 처벌한후	全ての罪人処罰したのち
대연을 배설하고	宴(うたげ)を開きご馳走を並べ
착한여자 불러들여	善き娘を呼び集め
공경하며 하는말이	敬まい慎みて言うには
소원대로 다일러라	願いのままに申してみよ
선녀되어 가려느냐	仙女になりたいのか

요지연에 가려느냐	瑶池宴に往きたいのか
남자되어 가려느냐	男に生まれ変わりたいのか
재상부인 되려느냐	宰相夫人になりたいのか
제모왕후 되려느냐	王の后になりたいのか
부귀공명 하려느냐	富貴功名がお望みなのか
네원대로 하여주마	思いどおりにして進ぜよう
소원대로 다일러라	願いのとおり申してみよ
선녀불러 분부하며	仙女を呼び出し命を下し
극락으로 가게하니	極楽へ案内するに
그아니 좋을손가	なんと良いことよ
선심하고 마음닦아	ひたすら善き心を磨き
불의행사 하지마소	不義をはたらくこと勿れ
회심곡을 업신여겨	回心曲を見下し蔑み
선심공덕 아니하면	善心功徳を疎かにすれば
생마현상 못면하고	畜生道から免れられず
구렁배암 못면하네	蛇なる[42]輪廻に陥るなり
조심하야 수심하라	慎みて身を修めよう
수신제가 능히하면	修身斉家よろしく修めば
치국안민 하오리라	治国安民をなすであろう
신상사후 참혹하니	人間死後は無残なり
알았나니 우리형제	これでおわかりであろうか
자선사업 많이하여	善行を大いに積んで
내생을 잘닦아서	わが一生善きに修め
극락을 나아가세	極楽に進みて往こう
나무아미타불	南無阿弥陀仏
관세음보살	観世音菩薩

四　「香頭歌」（別回心曲）の解説と分析

上記の「香頭歌」（別回心曲）に見られるいくつかの内容・言葉について、簡単な解説をつけ加えておく。

①　明沙十里の海棠花（ヘダンファ）（明沙十里に咲く海棠花よ／花の散るを悲しむことなか

[42] 六道輪廻の思想、蛇は輪廻の原因である三毒（貪・怒・愚）の中の怒りの象徴。

れ／来(きた)る三月春となれば／おまえは再び咲くけれど／我が人生一度過ぎゆけば／再び訪れることはなし）

初出とされる「入室歌」[43]の歌詞は、人生の儚さや未練が海棠花に喩えられている。明沙十里とは、朝鮮半島の北東に位置する咸鏡南道元山にある十里（8キロ）にも及ぶ海岸沿いの砂浜のことである。その砂浜とその周辺に咲く海棠花の美しさは、朝鮮時代より有名な景勝地で、金聖培は「入室歌は古代小説を始めとした俗謡に時折引用されており、特に挽歌では千篇一律に挿入され唱われている」[44]と解説している。

② 大門の外はあの世(チョスン)

大門の外があの世(チョスン)という隣接他界の観念は、韓国でも挽歌に限ってみられる特異な観念である[45]。死者の世界であるあの世を、実在する身近な大門の向こう側に設定することは、死そのものを生との同一線上、あるいは生との連続性で捉えていたことを示す。死者の世界を生と隣接する生活空間におくことは、死をいたずらに忌み嫌うのではなく、生の一部として受け止めていたことを示しているのかもしれない。大門のほかに、あの世は前方の南山、山の墓地、北邙山川など、いずれも現実の空間に設定されている。このフレーズは一般的にことわざとして分類され[46]、現在においても昔話や絵本などで頻繁に使われている。

③ 父上より骨を借り／母上より肉を借り

韓国で古くから愛誦されてきた偽経『父母恩重経』を出典とする観念。『父母恩重経』は中国で創られ、韓国に伝来している[47]。本来この観念は、輪廻転生を軸とする仏教思想的なものではないが、中国において儒教と習合する過程で生まれたものと思われる。『孝経』の有名な「身体髪膚受之父母」という言葉からも分かるように、初期儒教では必ずしも男女の性別と受け継ぐ部位が特定されていたわけではないが、『父母恩重経』ではそれぞれの部位が特定されている。仏教と儒教が習合される過程で、男女の差別は強化され、それを在来思想が一層補強している可能性が見られる。「父上より骨を借り／母上より肉を借り」というフレーズは韓国では民間思想、とくに巫俗信仰に強く受け入れられ、幅広い

---

43 作者は明庵處士、金聖培、『韓国佛教歌謡の研究』亜細亜文化社、1973、141頁による。
44 李緩衡、前掲載論文108頁
45 Lee Young Sik「장례요 사설의 단위주제와 구성양상」〈葬礼謡辞説の単位主題と構成様相〉『民俗学研究』16号、(2005）参照
46 崔吉城（重松真由美訳)『韓国の祖先崇拝』(御茶の水書房、1992）37頁
47 崔吉城、同上掲載書77－84頁参照

観念として定着している。

一方、骨に対する崇拝[48]は、古代東沃沮の埋葬方式[49]や古代朝鮮思想に基づく現象で、これがまた儒教と習合し、民間に広まった可能性があると思われる。

④　十王信仰（第一殿に秦広大王／…［省略］…／第十殿に転輪大王／十師王の命を受け）

十王とは、古代インドにおける冥界で、死者の罪を裁くとされている十人の王のことである。仏教とともに中国に伝わり、六朝時代の民間信仰と結びつき、唐の末期には道教的なものとも習合するようになったと言われている。

朝鮮半島には、高麗王朝期に「十王図」「十王経変相」などの仏教画が「十王経」という経典とともに伝わり、民間に広まっている。そこには死後審判の様子や地獄世界の凄惨な光景が生々しい図絵によって表現されており、民衆の間に地獄のイメージや認識が共有されるようになったと思われる[50]。一方で、あの世の使者や死後審判の具体的な様子は、巫俗のクッなどにも多く取り入れられ[51]、挽歌でもよく唱われるようになった。

⑤　あの世（チョスン）の使者

あの世の使者の存在は、挽歌で唱われているだけではなく、韓国人が一般通念として共有している観念であり、十王信仰や死後審判と結びついた観念である。挽歌では、死者があの世からの使者によって、強制的にあの世まで連れて行かれる道程がとても具体的に描かれている。それらの様子は、タシレギノルム[52]という巫俗の「薦度クッ」の裁判劇で詳しい[53]。あの世の使者とは具体的に日直使者、月直使者を指し、あの世を守る閻魔大王の使いである。両者は死者の霊魂を強制的に閻魔大王の前まで連れて行く役目を負っている。この使者の観念として、文献上確認できる最古の挽歌は『古今注』の「蒿里曲」であるが、そこではあの世の使者が「鬼伯」という名で登場しており、やはり死者を急き立てる存在として詠まれている[54]。

48　1900年代初頭まで珍島で引き継がれてきた草墳葬は、古代東沃沮の埋葬方式の風習を継承したもので、死者の骨を保存することにより永世を実現しようとする死生観に基づく葬礼制度。（徐淵昊、前掲載書209頁）

49　徐淵昊、前掲載書203頁

50　Pyon Mu Young「十王信仰を通してみる韓国人の他界観」『民俗学研究』３号（1996）224頁

51　徐淵昊、前掲載書参照

52　タシレギノルムとは、喪輿の運び手によって行われるグッであり、演劇である。その中の司宰ノリという劇は、死者を冥土に引導する過程をあの世の使者が演じる一種の裁判劇である。（徐淵昊、前掲載書参照）

53　徐淵昊、前掲載書参照

54　李緩衡、前掲載論文13頁参照

以上、見てきたように、挽歌は韓国の伝統的な他界観や死生観を受け継いでおり、そこには韓国固有の様々な他界観や死生観が見られる。一方で、挽歌を実際に唱うことは、冒頭で紹介した映画「祝祭」で描かれているように、様々な怨念、不和、恐怖などを昇華していく過程でもある。共に唱うことで、生と死が渾然一体となり、乗り越えられる救いのようなものをそこに見出すこともできるのかもしれない。

［付記］　本論は、全高香氏の修士卒論の一部をなすものである。南は指導教員としていくつかの助言を行った。基本的に全氏の業績となるものである。